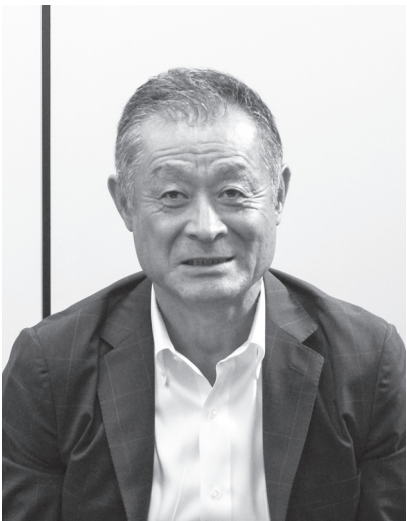


## 夢を語り行動する

元プロ野球選手  
琉球スポーツアカデミー代表取締役



石毛 宏典 氏

いしげ ひろみち  
石毛 宏典

聞き手  
むさで いさお  
室舘 勲  
(株式会社 潮琉社)  
代表取締役社長



### 農作業が嫌で始めた野球

——本日は西武ライオンズのシヨートとして11度の日本一へと押し上げ、MVPも獲得された石毛宏典さんにお話をお伺いします。まずは生い立ちからお伺いできますか。

石毛 私は、千葉県の旭町（現…旭市）で農家の次男坊として生まれました。小学生の時、放課後は遊びたいのを我慢して、すぐ家に帰

って畑仕事を手伝う生活でした。当時は機械もなく牛と人で田んぼを耕して、日常が運動です。田植え、稲刈りなどで、足場の悪い場所や傾斜を歩くことなど、遊びや暮らしの中で、今思えばスポーツに通ずるような身のこなしを覚えていったように思います。でも当時は、農家の手伝いはすごくイヤでした。だから中学生になった時に「家に帰りたくないな」と思って、部活をやりたいと言いました。一番遅くまで練習していたのが野球部だったので、野球部に入りました。それまでは遊びの野球しか知らなかったのが、スポーツの野球を学ぶことになるわけですね。

——農作業が嫌で野球を。それが野球との出会いだっただけですね。

石毛 でも、練習に行けば正座をさせられて、ぶん殴られる毎日ですよ。現代ではあり得ま

せんが、当時は野球に限らずどの部活も大体そうでした。中学を卒業したら野球はやめて、高校に行く気もなかったので大工になるうと思っただけです。

しかし中学3年の夏、野球部の監督から「高校野球をやれ」と言われ、監督は家にまで来て父に「高校野球をやらせてやってください」と言いました。当時は先生の影響が大きい時代ですから父も「そうですか、先生の言う通りに」となって、高校でも野球をやることになりました。地元には強豪の銚子商業高校もありましたが、市立銚子高校が野球部を強くしたいということで、そこに進みます。高校では朝早くから夜遅くまで野球をして、授業はずっと寝ているような生活で、高校3年の春の大会では強豪の銚子商業に勝利。しかし最後の夏は千葉県大会の決勝で負けてし

まいました。チームメイトは皆泣いていましたが、甲子園に憧れもなかった私は「やったー、夏休みだ」と喜んでいました(笑)。ただ、その銚子商業が甲子園で全国制覇したので、結果的にそこそこ強いチームになったのだと思います。

——甲子園優勝校の銚子商業と同等だったということですね。

**石毛** 高校卒業後の進路は、花王石鹼に就職したいと決めていたので、野球を続ける気はありませんでした。しかし千葉県大会を見ていた駒澤大学の野球部OBが私を見て引っ張ろうとしてくれて、監督が家に来てスカウトするわけです。

当時ちょっとグレっていた長兄が同席して「監督、こいつは野球でモノになるのか?」「モノになる」「わかった。親父、宏典を大学

で、一部残留できるように必死に練習をしました。そしてなんとか一部残留が決まった時、僕は初めて野球をやっていて涙を流しました。——それほど背負っているものがあったのですね。

**石毛** それでもプロには魅力を感じないで社会人野球に行こうと思って、プリンスホテルが新たに社会人野球を作るからと聞いて入社しました。営業マンとしても働いて、当時の支配人から「お前、素質あるぞ、十分将来は支配人になれる」と褒められて、真に受けて支配人を目指していたんです。2年間、社会人野球でプレーしたころ、父から「プロへ行く」と言われ、金を稼いで大学の授業料を返そうかなと思って、乗り気ではないけど「西武ライオンズなら行く」と言ったら、なんとドラフト指名が下り、契約をしました。

に行かせたってくれ」と言って決まりました。父も当時、悩んでいたと思います。長男が大学に進んでいないのに次男を大学に行かせて良いのかって。それを兄のほうから「行かせたってくれ、俺が頑張るから」といって、それから兄も心を入れ替えて真面目になりました。

——お兄様の男気、かっこいいですね。  
**石毛** 駒澤大学では寮に入りまして、六畳一間の二人部屋で、部屋長が4年生の中畑清先輩でした。4年生は神様ですので、何でも言うことを聞きました。本当は教職課程を取りたかったのですが「教職なんていいから走り込め、バットを振れ」と言われ、その通りに教職課程を諦めました。その指導のおかげか、日米大学野球大会の日本代表に選ばれました。4年の時にキャプテンに選ばれ、東都大学リーグでは一部から二部陥落の危機になりました

——プロ入りまでの道のりの選択は、ご自身で決めたわけではなかった。

**石毛** はい。自分が強い意志を持って決めてきたわけではなかったです。中学校で野球を選んだ時から、高校、大学、プロに入団するまで、分岐路ではいつも、誰かのアドバイスや指示に従ってきたのです。しかしどの選択も、決まった以上は本気でやる、腹を決めてやると取り組んできました。強制的に練習をやらされていた時期もあり、それが習慣になって体に染み込んで習性になっているので、誰も見ていなくても努力しましたし、練習をしました。どうせやるならうまくやりたいという、いわゆる向上心や向学心はあったのだと思います。

西武への入団が決まって、自主トレが始まった時が、野球人生で一番気合いが入りまし



と思ったのです。

### 常勝軍団、勝ちが勝ちを呼ぶ

——プロ入団以後の成績や記録は多くの人が知るとおりですね。

**石毛** 1981年、プロ初年度で新人王を取りました。印象的だったのは、1982年のプロ2年目に広岡達朗監督に出会い「ヘタクソ」と言われたことです。前年の新人王ですから「お前が石毛か。今年も頑張ってくれよ、

た。自分の意志で決めた道ではなかったかもしれない。でも、決まっただけなら、絶対やってみよう。

頼むな」みたいな対応かと思ったら「お前が石毛か。どう見てもお前のプレー下手だな」と言われて、リアルに「はあ？」と思いました（笑）。「お前は自己流、我流なんじゃ。そんなんじゃうまくならん。30歳過ぎたら体動かんくなるからダメだ」とけちよんけちよんに言われました。

——それは衝撃的な出会いですね。

**石毛** しばらくは素直になれなかつたです（笑）。ただ、やはり広岡監督の理論・理屈、根拠や姿勢、熱量も見ていてすごいなと思いました。教えられた選手はみるみる数字が上がっていくわけです。選手のスキルアップをし続けるわけです。すごい監督だと思いました。選手個々のスキルアップを図り、チーム力を上げる。選手は変わるんだと思いました。だから、広岡監督との出会いが、私

の野球人としての大きな転機になったことは確かですね。

——その指導力に姿勢が変わった。

**石毛** さらに、ゲーム前のチームミーティングの最後に「石毛、一言言え」としばらくスピーチを担当しました。ベンチの25名の面々には、先輩もいる、同級生もいる、後輩もいる。その中で一言言えと任された、これが良い刺激になりました。130ゲーム毎日続くわけですから、スピーチのネタ探しが大変です。本を読む、映画を見る、新聞を読む、雑誌を読む。情報収集が変わりました。良い意識づけ、動機づけになったんですね。先輩もいるから偉そうにできない、でも全体の士気をあげるという意味では良いバランス感覚が磨かれました。

——こうして常勝軍団の西武ライオンズが生

まれるわけですね。

**石毛** 1986年からも森祇晶監督の指揮のもと多くの勝利を経験しました。結果的に私は14年間ライオンズに在籍して、11度のリーグ優勝をし、多くの勝ちを経験させてもらいました。

組織づくりとしては、当時のGMのような立場だった根本陸夫さんが良い素材の選手を集め、広岡達朗さんが鍛えて野球観をあげて野球人のスキルアップをやっていった。そしてレベルアップしたレギュラー、ベンチのマネジメントを森祇晶さんがやっていった。これが良いチーム、良い組織を作るための一つのモデルケースになったのかなと思います。

そこには「勝つ」ことで組織が作られていった側面も大きいと思っています。自分たちが勝つことで、関わっている方々が喜んでく

れる。俺たちは自分だけじゃなくて、背中にいっぱい背負っているんだと使命感や責任感も生まれる。勝つほどに、相手チームの良いところを学び、取り入れていきました。

勝つほどに素直になって認めて、清らかに頭や心に入っていたのだらうと思うんですね。勝ち続けることによって得られるプラス材料でした。

——現役を退いてからはどのような経験をされたのですか。

**石毛** ダイエーの二軍監督と、オリックスの一軍監督を経験しました。実はその前に、アメリカにコーチ留学しています。メジャーリーグの良い部分、悪い部分を見ました。実際アメリカと日本の野球は違うので、単純に比較はできません。日本には、技術を使う、何かを作るという日本人の器用さや技術力があ

りアも考えると、圧倒的にパイが足りないといった背景のもと、野球人口の受け皿をもっと増やすべきだと感じて、アメリカで見た独立リーグのイメージを元に独立リーグ構想を立ち上げました。地域は北海道や東北なども検討しましたが、最終的に野球王国の素地がある四国で2005年「四国アイランドリーグ」が開幕しました。

——野球界全体の視野で見ていたのですね。  
**石毛** 私自身は選手も監督も解説もそれなりに充実した経験をさせてもらいました。ですから、今度は野球界全体のことを考えてアクションしたいと思ったのです。

さまざまな問題もあり、現在は残念ながら私は前線にはおりませんが、四国アイランドリーグを皮切りに、いくつかの独立リーグが各地で立ち上がりましたので、一石を投じた

ると思います。ものづくりに対しても野球においても日本観はあって、私はそれを世界に誇って良いと思っています。

指導方法とは別に、アメリカの独立リーグも見学して、その発想の一旦を見ました。後々、日本に独立リーグを持ち込む発想はここから生まれました。

——日本の独立リーグ発足はどのように考えられましたか。

**石毛** 1990年代、バブル崩壊とともに景気が悪くなり、多くの社会人野球が衰退しました。私の時代には230あった団体も、70にまで減ってしまっています。野球人口は減っていませんので、社会人選手たちが溢れてしまう状況になっていったのです。企業スポーツが衰退して若者が溢れる中で、いろんな事件も起きる。プロ野球選手OBのセカンドキャ

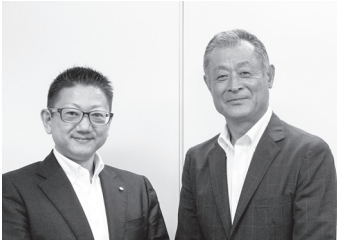
効果はあったのかと思います。

誰もが理想的なプロ野球選手になれるわけではありません。競争倍率もどんどん高くなりました。社会人野球もパイが少ない中で、独立リーグという選択肢もあれば道が広がります。独立リーグから頑張ってプロで成功している選手もいます。「高校からプロ」「大学からプロ」「社会人からプロ」そして「独立リーグからプロ」という第4のルートを作れたことは良かったと思います。

## 日本の未来のために、 沖縄の地で新たな挑戦

——現在では沖縄で新たな挑戦をしていますね。

**石毛** 今、沖縄で「琉球スポーツアカデミー」の事業を立ち上げ、2025年3月の開校を目指し奔走しています。野球界のことも



石毛 振り返って私は、自分で決めた人生ではなく、周りから指示されて、与えられた場所です。でも、今の若い人たちは色々な情報をSNSで取れてしま

そうですが、スポーツ界全体、そして教育界にも視野を広げることです。

近年、若者のモラルハザードや青少年育成が多くの問題になっています。倫理観やモラル観、ルールをしっかりと理解して守れる子どもたちを教育することが大切です。スポーツを通じて人間性を養いながら、学術にも優れた人材育成をしていくことができないかと思っています。

例えば、アメリカ・フロリダ州のIMGアカデミーは、錦織圭選手の出身校です。全寮制でスポーツに最適な環境を備えているスポーツアカデミーです。また、大谷翔平選手の存在も注目されています。彼の素晴らしい点は、野球が上手いことや二刀流であることだけではありません。ゴミを拾う、道具を大切に、人に丁寧な対応をする。そういった

あり、グローバルな空気と、学術的な研究機関や大学院なども集まっています。

ぜひ、多くの人に力を貸してほしいと思います。いろんな知識・経験・人材が集まれば、大きなうねりを生み出して、将来の日本を変えていくのではないかと思っています。

——最後に、次世代へのメッセージをお願いします。

人間力が素晴らしいからこそ、世界に大きな影響を与えているのです。

スポーツと学力と人間力。これらを相互に相乗効果を上げながら育てることが出来る事業を立ち上げます。正しい倫理観を持った人がスポーツで世界に羽ばたいて活躍する。彼らが英語を駆使して素晴らしいスピーチをしてグローバルに活躍する。そんな若者が輩出できたらいいなと思います。

スポーツに携わる全員がプロになれるわけではありません。アクシデントや故障もあります。現在では、アスリートに対して多くのサポート職が必要な時代です。メンタルトレーナー、管理栄養士、トレーニングコーチ、スポーツアナリスト。そういった資格が取れる、研究機関がある環境を整えたいと考えています。沖縄という土地はアジアのハブでも

う。それらは有効活用してもらって結構ですが、自分で歩くこともすごく大切だと思います。

若い人が夢を語って志を発信して、そこにいろんな同志が集まってきて、エネルギーの塊を作って、アクションを起こしてもらいたいと思います。一歩じゃなく、五歩も十歩も百歩も歩みだしてほしいなと思いますね。若い人のエネルギーはすごいと思いますから。——本日はありがとうございました。

■いしげ・ひろみち■

1956年 千葉県生まれ

1980年 西武ライオンズ入団

2004年 IBLJを設立し、四国アイランド

リーグを設立

2007年 IBLJを退任

2021年 琉球スポーツアカデミー株式会社を

設立。2025年3月開校を目指し

活動中

